

“インスピレーション溢れる舞踊—フォークロアから現代へ” ポーランドの民族文化、まもなく日本上陸

ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」は、プロジェクト“インスピレーション溢れる舞踊—フォークロアから現代まで”を実施する—それは、革新的なポーランド文化普及促進事業・ダンスパフォーマンス『Exodus／エクソドゥス』を日本に紹介するものである。当プロジェクトは、その斬新な着眼点が評価され、ポーランド文化・国家遺産省の事業「インスピレーションを促す文化」の一部として、国家の経済支援を受けて実現する。しかしながら、新型コロナウイルスの世界的感染拡大に伴い、録画のインターネット配信という形で紹介される運びとなった。

「シロンスク」舞踊団は、ダンスパフォーマンス『Exodus／エクソドゥス』とポーランドの民族舞踊の録画をインターネット配信することで、現状の公衆衛生推奨事項を満たしながら、文化事業を従来の姿に戻すことを目指して戦略を進めている。幾多の課題の達成、並びに、各方面との協力活動を経て、ポーランドの民族舞踊は日本の視聴者により広く届けられるチャンスを得た。ダンスパフォーマンス“プレリュード”を含む^{スベクタクフル}超大作『Exodus／エクソドゥス』については、ポーランド広報文化センター主催・今秋開催のポーランド・フェスティバルでも告知される。また、11月に予定されている本作品のインターネット配信に先駆けて、東京、札幌、大阪、敦賀、岡山では、動画鑑賞会を開催するための準備が進められている。伝統に深く根付いたポーランドの民族舞踊の特異性を伝える3つのダンス～ポロネーズ、クラコヴィアク、トゥロヤク～の振り付けレッスン動画は、プロジェクトに欠かせない一部分となっている。

ダンスパフォーマンス『Exodus／エクソドゥス』は、世界の文化遺産におけるポーランド文化の存在・役割を明らかにすると同時に、その普遍性を示すことを目指している。芸術的意図としては、文化の変遷、即ち、伝統芸術と現代アートといった“遷り変わる”ダンスパフォーマンス・テクニックの連鎖を表現することである。同時に、現代舞踊と伝統舞踊を融合し、民族舞踊とフォークダンスのワークショップと組み合わせることで、国際的な舞踊・音楽界のコミュニティを結びつける一因としての、伝統的ポーランド文化—それは時代を超えたものである—の重要性を効果的に伝えていく。また、この企画を通して、日本のポーランドダンス愛好家の存在・貢献がより広く認識されることに期待している。

スペクタクル『Exodus／エクソドゥス』は、文化の具象的な出会いであり、舞踊団「シロンスク」の作品から着想を得た様々なタイプの舞踊と音楽のプレゼンテーションである。創作を手掛けたのは、ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」の振付師ミハウ・ズプコフ。ヴォイチェフ・キラルの音楽を通して、幸福、願望の実現、人々との親密性を求める旅としての“人生”を世界に示した人物だ。この作品はまた、自己の内省であり、他者との関係・結び付きを育む過程での内面的欲求でもある。ヴォイチェフ・キラルの音楽と多元的な舞台美術から成る空間で、生涯に渡る“人の旅”を物語っている。

このスペクタクルは、大集団での逃亡あるいは移動において、一人一人が究極の試練に立たされる現象について物語る。それは、各々の人間の内なる真実—本質—を明らかにし、自らに選択を迫る一種のテストのようなもの。大集団の動きの渦に引き込まれながらも各自が自立性を保ち、自身の直観、感情、常識をもとに、自己のルールに従って最終決定を下していく。こうして、魂の根源を彷徨う孤独な旅は始まるのだ。宇宙の大海を旅する他者の合間に、自分の場所を見つけることを目指して—。物語の流れを効果的に演出する舞台美術は、注目に値する。

『Exodus／エクソドゥス』は、今から100年前の歴史的出来事に着想を得て創られた。1920～1922年、日本政府がロシア革命後の内戦下のシベリアに日本赤十字社を動員し、多数のポーランド人孤児を救済した事実である。日本の援助により、実に800人近くのポーランド人孤児が敦賀港に辿り着き、各地で手厚い看護を受けた。昨年、日本とポーランドは国交樹立100周年を迎えたが、今年2020年は、日本によるポーランド人シベリア孤児救済100周年なのである。

その一方で、第二次世界大戦中、ナチス・ドイツの迫害等から逃れるユダヤ難民のために自らの危険も顧みず、実に4,000を超える日本通過ビザを発給したリトアニアのカウナス領事代理・杉

原千畝氏の生涯には、より強いインスピレーションを得たと言える。救済された者の多くはポーランド人で、シベリア孤児と同様に敦賀港を經由して日本上陸を果たした。

ダンスパフォーマンス『Exodus／エクソドゥス』は、世界で最も栄誉あるポーランド人ピアニスト兼作曲者の一人として知られるヴォイチェフ・キラルの音楽に準じている。クラシック音楽と映画音楽の双方を手掛け、白鷲勲章及び星付きコマンドルスキ十字勲章をはじめ、数々の権威ある表彰を受けた人物だ。ヴォイチェフ・キラルの初期の作品には、新古典主義の影響が見られるが、作曲家は後に、ベラ・バルトック、イゴル・ストラヴィンスキー、ドミトリイ・ショスタコーヴィチの音楽からインスピレーションを受けている。1960年代はクシシュトフ・ペンデレツキ、ヘンリク・グレッツキ両氏と創作活動を共にし、その後の10年間は自身のルーツと民俗音楽^{フォークミュージック}に回帰した。1960年代、「シロンスク」舞踊団の申し出に、約30曲の歌とダンスのためのフォーク・ミュージックを作曲し、それらの作品は、今なお「シロンスク」のレパートリーに大きな輝きを与えている。「前奏曲とコレンダ」、「ボグロジツァ（神の母）」などの宗教音楽作品もこの時期に創られ、クラシック音楽の他にも数多くの映画音楽を生み出し、世に広くその名を知られることとなる。キラルは、アンジェイ・ワイダ、クシシュトフ・ザヌッシ、ロマン・ポランスキー、フランシス・フォード・コッポラらポーランド及び世界最高峰の映画監督と仕事を共にし、ポランスキー監督の映画『吸血鬼（1967）』をはじめとする130以上の映画作品の音楽を手掛けた。

ポーランド文化・国家遺産省の支援事業である当プロジェクトは、以下に挙げる各団体の協力を得て実施される運びとなった：ポーランド広報文化センター、人道の港敦賀ムゼウム、シアターX（カイ）、フォーラム・ポーランド組織委員会、公益社団法人日本フォークダンス連盟、日本・ポーランド民族舞踊友好協会、北海道ポーランド文化協会、在日ポーランド芸術・科学ミッション、ビトム市ダンス・ムーブメントシアター「ロズバルク」。

超大作『Exodus／エクソドゥス』は、ポーランド文化・国家遺産省の支援事業（2017～2022）「多年に渡る Niepodległa（独立）」の一環として実地された国際文化事業『ポーランド100』の一部として、アダム・ミツケヴィチ・インスティテュートと共同で実現される。

ミハウ・ズプコフ（プロフィール）：

ペルミ（ロシア）バレエ学校卒業。1980年、ニジニ・ノヴゴロドのオペラ・バレエ劇場でデビューを果たす。その後はリトアニア国立オペラ・バレエ劇場に登場し、1992～2002年にはクラクフ歌劇場（ポーランド）バレエ団のソリストとして在籍するなど、22年間、プロダンサーとして活躍する。「白鳥の湖」、「眠れる森の美女」、「くるみ割り人形」などのバレエ作品ならびに現代舞踊のステージに出演。1995年、バレエ団「オラニム・ダンス・グループ」を設立し、ポーランド国内外で数多くの舞台に立つ。2002年、「シロンスク」舞踊団がヴォイチェフ・キラル記念式典（クラクフ STU 劇場にて開催）に出演する際、ワルツの振付を担当したことで連携を開始。今では「シロンスク」バレエ団の優秀な教師として、また、卓越した振付師として、舞踊団の芸術的創造性を支える柱となっている。以下に挙げるプロジェクトは、ズプコフの豊かな実績の中で特に重要な位置を占めている：スタニスワフ・モニューシュコフの音楽を伴う舞踊団の演目「魔法」の振付（2003）。「シロンスク」創立55周年の際、舞踊団のダンサーと作曲家ゴラン・ブレゴヴィッチの共演にあたり、舞踊団と共に舞台を創り上げる。2006年、自身の創作的ビジョンに従って、国際現代舞踊サマースクールを設立、自ら運営管理にあたる。これは2007年以降、「シロンスク」舞踊団の教育事業「夏季芸術スクール」として、より大きな規模で開催されている。2014年、振付師兼教育者として、国際芸術・教育プロジェクト「ポーランド・ノルウェーのフォークダンス&インプレッション」に参加。ポーランドとノルウェーの各地でコンサートならびに一連のダンス・ワークショップを開催し、両国の文化を広く紹介する。2019年、論文「プロダンサーを養成するモダンダンス・テクニクの原則。ある種の問題

点」を発表し、博士号を取得。現在は「シロンスク」舞踊団に勤務。舞踊団のバレエ団代表、クラシックバレエと現代舞踊の教育者、並びに、振付師として活躍を続けている。